

児童の表現する意欲・自信を育む学級・授業づくり

—自他の「良さ」や「思い」を尊重しあえる学級活動と図画工作の授業実践—

教育実践研究科 教職実践専攻 教職実践基礎領域
佐藤 絵美理

I はじめに

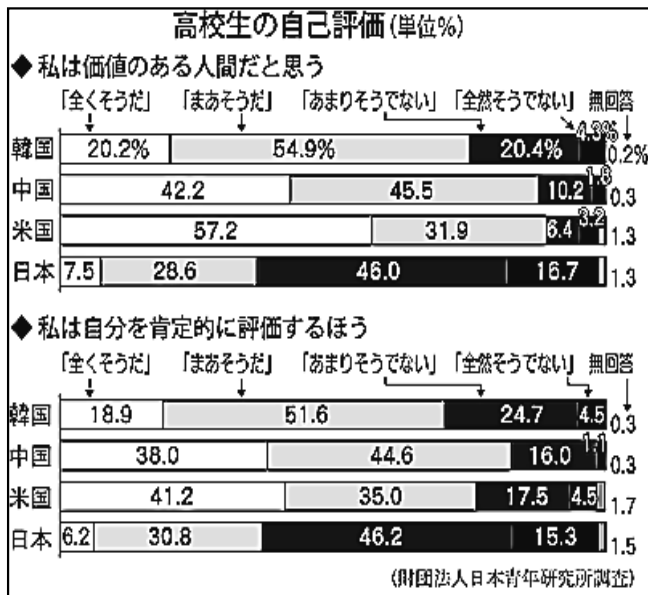
学校の中には、自分の意見を述べる日常的な授業の場面や「学芸会」で演技する場面など、様々な「表現」の場面がある。児童は、一つ一つの「表現」の活動を通して自己への自信を高めたり、他者の良さに気付いたりしながら成長している様子が見られる。

一方で、小学校のボランティア活動や教育実習などで、「表現」に関わる課題をもっている児童・生徒に出会うことも多々あった。そして、サポーター活動を通して、児童・生徒の「表現」に関わる課題には、技能・技術面だけではなく、学級環境や自己肯定感といった内面に関わる部分も大きな影響を与えているのではないかと考えるようになった。そこで、「児童の表現する意欲・自信を育む学級・授業づくり」を実践テーマとして、児童個々が自他の「思い」や「良さ」に気付き、尊重しあえる学級活動と図画工作の授業実践を中心に実践を行った。

II 実践テーマ設定について

1 現代の児童・生徒の様子から考えられる課題

財団法人日本青少年研究所は2011年に日米中韓の高校生計約8000人に対して、「自尊感情に関わる調査」を実施した。実施した調査の調査から、日本の高校生は他国の高校生と比べると、すべての項目について自分を低く評価していたことがわかった。



【図1】 自尊感情に関わる調査結果(2011)

小学校の児童の場合も、学年があがるにつれて自分の「良さ」や「思い」に対して肯定的な受け止め方をすることが難しくなる様子が多くみられる。自他を強く意識し始める思春期頃から、自己に対する評価の土台が形成され始めていると考えられる。

児童は、「表現」の面でも同様に、思春期からの生理的な発達に伴い、自我や他者をより意識した「意識的批判的な表現」を意識するようになっていく。ローウェンヘルド(1963)は、その際に得た、自分の「思い」を表現しきった達成感や満足感、あるいは苦手意識が、大人になってからの表現に対する意欲・自信に影響を及ぼすことを、「青年期の危機」として課題提示している。

【表1】 ローウェンフェルドの発達段階説

⑥ 決定の時期 (13~17歳) 青年期の危機 視覚型・触覚型・中間型
⑤ 疑似写実的段階 (11~13歳) 推理の段階・感覚の2分化 視覚的・主観的
④ 写実主義的傾向の芽生え (9~11歳)
③ 様式化の段階(7~9歳) 形態概念の成立
② 様式化前の段階(4~7歳) 再現への最初の試み
① なぐり描きの段階(2~4歳) 自己表現の最初の段階

このことから、小学校高学年から高校までに培った成功体験や、表現への前向きな姿勢が、自己への意欲・自信を支える土台となっていると考えられる。児童・生徒が、表現を通して自他と対等に向き合いながら、互いの「良さ」や「思い」に気付き、尊重することができる学級・授業づくりが必要だと考えた。

2 表現における児童の課題

名古屋市立M小学校でのサポーター活動を通して、児童の中には、「思いがあってもどのように表せばいいのかわからない」といった技能面の課題をもっている児童や、自己の「思い」や「気付き」自体が引き出せず「自分が何をあらわせばいいのかわからない」「思いや気付きがないまま漠然と手だけを動かしてしまっている」といった内面の部分に課題をもっている児童が

いることがわかった。さらに、自他の比較・評価を通して劣等感をもち、表現に対する苦手意識を深めてしまっている児童などが見られた。

「表現」は、技能面の能力の差が一目でわかってしまう活動でもある。そのため、技能が高い児童にとっては活躍の場面になりやすいが、苦手意識をもっている児童にとっては自他を比較してさらに自信を喪失してしまう可能性もある場面である。児童が、表面上の「上手さ」だけを追求することにとらわれず、自他の「良さ」や「思い」と向き合う過程で得られる学びや、作り出す喜びを実感できるような授業づくりを目指す。

Ⅲ 本研究の主題

1 研究のねらいと仮説

【本実践主題・副題】

表現する意欲や自信を育む学級・授業づくり
—自他の「良さ」や「思い」を尊重しあえる学級活動と図画工作の授業実践—

児童が生き生きと表現できるようになるためには、まずは自分自身の「思い」や「良さ」に気づき、大切にしながら最後まで活動に取り組む経験を多く積むことが必要だと考える。また、「良さ」や頑張った姿を他者から認められることで、自分自身に対する自信をさらに高めていくことが出来るようになると考えられる。同時に、他者の考えや「思い」に触れ、自分にも他者にもある「良さ」を尊重しながら、互いに高め合っていく姿勢を引き出していきたい。

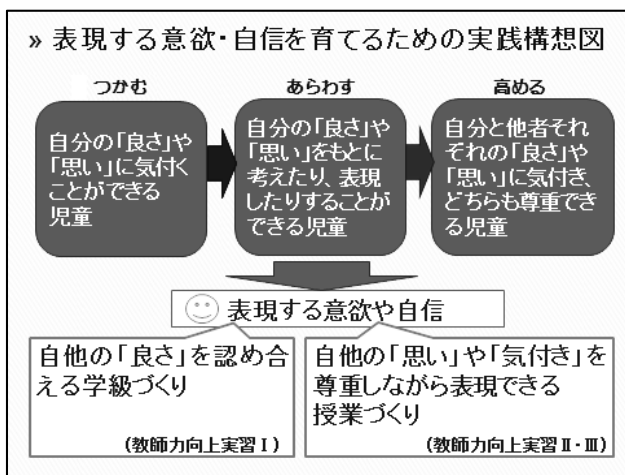
研究の全体の仮説を以下のようにする。

【全体の仮説】

自他の「良さ」や「思い」に気づき、尊重できるようになれば、表現する意欲や自信を育てることができるようになるだろう。

2 研究の手だて

本研究では、図2で示すように「学級づくり」「授業づくり」の2つの視点から、「意欲や自信をもって表現できる児童」の育成を目指した実践を行う。



【図2 実践の全体構造】

(1) 自他の「良さ」を認め合える学級づくり

児童の生活の基盤となる学級環境は、児童の学習意欲や生活態度に大きく影響している。児童が意欲や自信をもって表現できる学級をつくるためには、自分や他者それぞれがもつ「良さ」に目を向け、尊重しようとする児童一人一人の力を育てていくことが必要である。また、自他のもつ「良さ」をもとに学んだことを活かし、互いを高め合おうとする姿勢も大切である。そのために、授業内だけではなく、日常生活の関わりの中で気付いた自他の「良さ」に目を向け、伝え合う学級活動を行っていく。

(2) 自他の「思い」や「気づき」を尊重しながら表現できる授業づくり

児童の表現する意欲や自信を高めるためには、自分の「思い」や「気づき」を大切にしながら表現しきる経験が必要である。表現が苦手な児童は、自分の「思い」や「気づき」を活動の中で十分活かすことができず、表現の活動に対する達成感や満足感が低い様子が見られる。児童個々が自分の「思い」や「気づき」をもとに考えたり、形に表すために試行錯誤したりしながら表現しきる経験を通して、表現する楽しさや喜びを実感させる授業づくりを目指していく。

また、自分と他者の両方の「思い」や「気づき」を尊重できるようになることも、表現する意欲や自信につながっていくと考えられる。児童個々が自分の「思い」や「気づき」に向き合う過程で得た学びや、互いの「良さ」にいかに関心することができたかといった、一人一人の目には見えない部分の成長にも目を向けていくことを大切にしたい。自他それぞれがもつ「良さ」をもとに、互いに表現する意欲や自信を高め合える授業づくりを目指していく。

Ⅳ 実際の実践

1 教師力向上実習Ⅰ

自他の「良さ」を認め合える学級づくり
—「ニコニコの木」の実践を通して—

(1) 児童の実態

実践は連携協力校である名古屋市立M小学校の第2学年の学級(児童数11名)で行った。児童は、下級生や周囲の友達への思いやりをもって生活し、相手の良さを尊重しようとする姿勢をもっている。

しかし、活動中に自信のない言動を繰り返し、生き生きと活動に取り組むことが難しくなってしまう児童や、不安が広がりやすい児童同士の関係など、内面に関わる課題が見られる。

(2) 実践のねらいと目指す児童の姿

一人一人の児童がもっている「良さ」に目を向け伝え合う活動を行い、自他の頑張っている姿を尊重していきこうとする児童の育成や学級づくりを目指す。また、活動を通して、自他それぞれがもつ「良さ」から学ん

だことをもとに、互いを高め合うことの喜びや大切さを実感できるようにする。

【目指す児童の姿】

- ・ 自分の「良さ」に気付き、受け止めることができる
- ・ 友達の「良さ」に気付き、伝え合うことができる
- ・ 自他のもつそれぞれの「良さ」を尊重し、互いに高め合うことができる

(3) 実践の流れと手だてについて

教師力向上実習Ⅰでは、表2のような流れで実践を行った。目指す児童の姿を引き出す手だてについては、以下に示した。

導入	道徳 (1時間)	自分自身の「良さ」に目を向けるとともに、絵本の教材を通して、一人一人がもつ「良さ」に目を向けることの喜びや大切さについて考える。 ※手だて①
展開	学級活動 (5日間)	生活の中で見つけた学級の友達の良いところをカード「ニコニコの葉っぱ」に書いて伝え合う。また、「ニコニコの葉っぱ」を用いて掲示物「ニコニコの木」を成長させていく活動を通して、互いの「良さ」を尊重する姿勢を育む。 ※手だて②③
まとめ	学級活動 (1時間)	グループワークトレーニング『おまわりさん、迷子の友達探してよ』を通して、今までの活動で見つけた互いの「良さ」を言葉で伝え合う活動を行う。活動全体を振り返り、自他の「良さ」を尊重する姿勢もって互いを高めていけるようにする。

【表2 教師力向上実習Ⅰの実践の流れ】

〈自分の良さに気付き、受け止めさせる手だて〉

手だて① 自分の「良さ」に目を向けて、言葉で表す活動

普段はあまり意識しない自分自身に目を向けることで、自分の「良さ」について考えるきっかけをつくる。また、自分で振り返るだけでなく、友達や家族から教えてもらうことで、自分では気付かなかった自分の「良さ」を知ることでもできると考える。

〈友達の良さに気付き、伝え合わせる手だて〉

手だて② 友達の「良さ」を言葉で伝える活動

友達の「良さ」を見つけて、「ニコニコの葉っぱ」に書く活動を行う。言葉であらわすことで、普段は気付いていてもあまり伝えられなかったり、忘れてしまったりしていた友達の「良さ」に目を向ける姿勢を引き出す。また、友達から自分の「良さ」を認められることで、自分自身を前向きに受け止めることができるようにしたい。それらを通して、互いの「良さ」を大切にしながら生活できる姿勢が育まれると考える。

〈自他のもつ「良さ」を尊重し、互いに高め合う姿勢を引き出す手だて〉

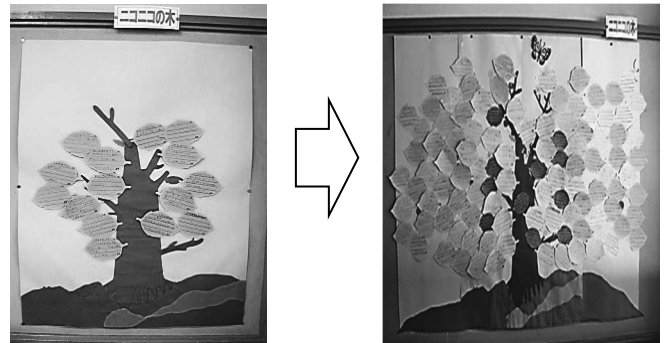
手だて③ 掲示物の工夫

児童が書いた「ニコニコの葉っぱ」を「ニコニコの

木」に貼っていき、活動が進むとともに木が成長していく様子を確認できるようにする。視覚的な工夫を行うことで、児童が日常的に互いの「良さ」を意識し、高め合おうとする姿勢を引き出すことが出来ると考える。

(4) 活動の様子

「ニコニコの木(学級活動)」の活動の様子を、成果(○)と課題(●)でまとめた。



1日目 **5日目**

【図3】「ニコニコの木」の変化

(1日目)

○ 児童全員にまずは2枚の葉っぱを渡すようにしたところ、全員が友達に1枚~3枚の葉っぱを書くことができた。2枚では足りなく「もっと書きたい」とすぐに相手の良さを書くことができる児童もいた。

● 放課に時間を作って書くことが難しい児童がいた。教師からの生活の中で互いの良さに気付かせるような声掛けが必要である。

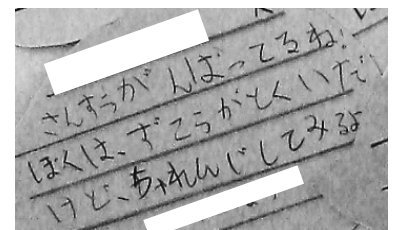
(2日目)

○ 児童は「ニコニコの木」の葉っぱが増えた様子を喜んで見られた。児童に声掛けをしたり、児童の良さを授業中に褒めたりしたところ、「良いところ」を意識できた児童が増えた。

● 「思い」があっても文章にうまく表せない児童がいることも分かった。まずは言葉で「思い」を引き出したり、友達の葉っぱを紹介したりしていくと良いのではないかと考える。

(3日目)

○ はじめはあまり自分の良さに気付いていなかった児童が、友達の良さとともに自分の良さも意識できるようになってきた様子が見られた。



【図4】「ニコニコの葉っぱ」

● 言葉がうまく出ない児童のために「言葉の型」のある葉っぱを用意した。

(4日目)

○ たくさんの友達に目を向けようとする児童や、書

く枚数は少ないが友達が一番良いところを詳しく書こうとしている児童など、意欲や思いをもって活動に取り組むことができている児童がいた。

- 書くことを負担に感じている児童の様子が見られた。書くことが義務的になると、活動の意味合いが少しずつずれてきてしまうと感じた。書く時間をつくると集中して取り組めるので、教師が意図的に集中して活動に取り組ませる時間を作ることも必要だと感じた。

(5 日目)

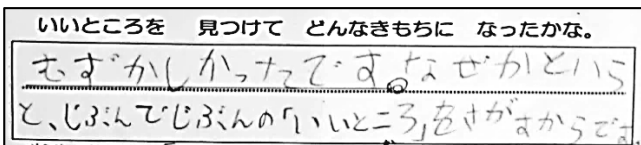
- 学級の全員に葉っぱを書くことができた児童がいた。日常生活でも学級全体に目を向けることができる児童は、相手の良さを見つけて書くことが得意な様子が見られた。
- 生活の中で友達の良いところを見つけた時に、「今のニコニコの木だね」と反応していた児童がいた。相手の良さを意識できている児童の様子が見られた。
- 同じ人ばかりに書いてしまった児童がいた。関わりが薄い相手にも目を向け「良さ」を見つけてさせる支援が必要だった。

(5) 手だての成果(○)と課題(●)

〈自分の良さに気付き、受け止めさせる手だて〉

手だて① 自分の「良さ」に目を向けて、言葉で表す活動

- 自分の「良さ」について考え、「良さ」を前向きに受け止めていこうと考える児童が出てきた。
- 自分の良さを書く際に、自分で自分の「良さ」を書くなんで自慢しているみたいで難しいと発言した児童が出てきた。



【図5】 ワークシートへの記入内容

児童の素直な思いを大切にしている時間を設けると、より学びが深まったのではないかと考える。

- 自分の「良さ」を見つける必然性が薄く、児童の中にはあまり自分にひきつけて考えられなかった児童もいた。児童に必然性をもたせるために、より児童の生活に沿った教材や発問を用意する必要があった。

〈友達の良さに気付かせ、伝え合わせる手だて〉

手だて② 友達の良さを言葉で表す活動

- 普段気付いていても伝えられなかったり、忘れてしまったりしていた友達の「良さ」に目を向け、意欲的に伝えることが出来た児童がいた。(図6)
- 「言葉の型」を用意したことで書きやすくなった児童がいた。今後は、「型」をはじめに取り入れ、徐々に自分の言葉で書けるように活動を展開させていきたい。

- 児童によっては毎日活動することが難しく、全員に書くことが難しかった児童がいた。

- 書く内容に深まりが生まれなかった児童や、同じ児童ばかりに書いてしまった児童がいた。児童の「伝えたい」「あらわしたい」という気持ちを引き出す工夫や、「書く力」に対しての支援についても考えていく必要がある。

〈自他のもつ「良さ」を尊重し、互いに高め合う姿勢を引き出す手だて〉

手だて③ 掲示物の工夫

- 日常的な場面で互いの「良さ」に対して意識的に目を向けることができていた。
- 成長する「ニコニコの木」の様子を楽しみにしている様子が見られた。低学年の児童の場合、まずは「活動が楽しい」という気持ちを大切にしながら「ねらい」に近づけるようにしたい。
- 児童の活動に差が出た場合に、カードをもらえない日がある児童が出てきてしまう。そのため、記されたカードを児童に直接手渡しするのではなく、掲示物に直接貼るようにした。

(6) 実践のまとめ

児童は、友達の「良さ」に強い感動を覚えた時に、より「伝えたい」「あらわしたい」という気持ちをもって、具体的な言葉で「思い」を記入しようとしていた。児童の生き生きとした感動は、意欲的に表現しようとする姿勢につながっているとわかった。また、そのような生き生きとした「思い」や「気付き」は、自他に対する視点を豊かにしていく効果があると考えられる。

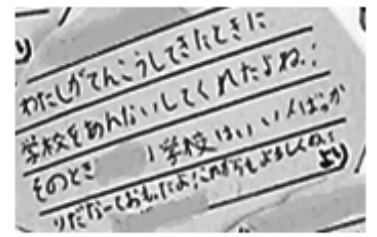
実践では、「良いところ」や「がんばっているところ」という言葉の内容が曖昧であったために表面的な視点から深まりが生まれなかった児童や、相手の良さを見つけることはできても「書く」ことが負担になってしまった児童もいた。負担になった児童にとっては、義務的に他者の「良さ」に目を向けることになってしまいう可能性があった。児童の実感を伴った「思い」や「気付き」をいかに引き出し、「伝えたい」「あらわしたい」という意欲につなげていくことができるかが今後の課題である。

2 教師力向上実習Ⅱ

自他の「思い」や「気付き」を尊重しながら表現できる授業づくり—
—図画工作の「表現」「鑑賞」の授業実践を通して—

(1) 児童の実態

実践は連携協力校である名古屋市立M小学校の第6学年(児童数12名)の学級で行った。児童の様子からは、縦割り班活動などで下級生をまとめるリーダーとして



【図6】ニコニコの葉っぱ

ばかりに書いてしまった児童がいた。児童の「伝えたい」「あらわしたい」という気持ちを引き出す工夫や、「書く力」に対しての支援についても考えていく必要がある。

活躍する姿や、6年間をともに過ごした友達の長所も短所も理解しながら関わり合うことができている姿が見られる。特に、縦割り班活動で取り組む「リズム縄跳び発表会」にむけて、一人一人がリーダーとしての役割を担い、どのような振り付けにするか、どのように下級生をまとめるかを試行錯誤しながら互いに成長できている様子が見られる。

表現の課題としては、自分の「思い」を言葉や形で表現する場面で、自分が何をあらわしたいのかといった「思い」や「気付き」をうまくつかめない児童や、自分の「思い」を具現化するまで向き合いきることが難しい児童がいる。

(2) 実践のねらいと目指す児童の姿

児童の表現する意欲や自信を高めるためには、自分の「思い」や「気付き」を大切にしながら表現しきる経験が必要である。児童個々が自分の「思い」や「気付き」をもとに考え、形に表すために試行錯誤しながら表現しきるまでの過程を大切に、表現する楽しさや喜びを実感させる授業づくりを目指していく。

また、自他それぞれがもつ「良さ」に気付かせ、互いに表現する意欲や自信を高め合える授業づくりを目指していく。

【目指す児童の姿】

- ・ 自分の「思い」や「気付き」をもち、それをもとに考え、表現することができる
- ・ 自他のもつそれぞれの「良さ」を尊重し、互いに高め合うことができる

(3) 実践科目・単元

実践教科：図画工作

単元名：「かたまった形」(6時間完了)

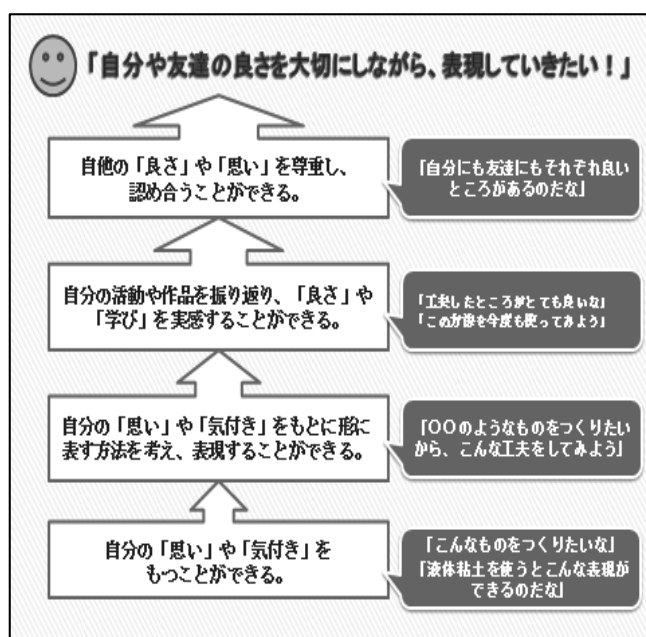
『 不思議な動物園

～学校の中に動物園をつくろう～ 』

本題材は、白い布を液体粘土で固めて出来た形をもとに、イメージを膨らませて作品をつくっていく題材である。実践では、「生き物」というくくりの中で児童にイメージを引き出させるようにした。

(4) 実践の流れと手だてについて

児童が「思い」や「気付き」をもち、最後まで表現しきるまでのイメージを図7の「表現する意欲・自信が育つまでの構想図」で表した。また、実践の具体的な流れと児童の力を引き出すための手だてについては表3に記入した。



【図7】表現する意欲・自信が育つまでの構想図

【表3】 教師力向上実習Ⅱの実践計画

時	学習活動	自他の「思い」や「気付き」を大切にさせる手だて
1 ・ 2 時	<ul style="list-style-type: none"> ・ ペットボトルや針金を組み合わせて芯材を作る。 ・ 芯材に液体粘土に浸した白い布をかぶせながら、自分がイメージする生き物や、自分が面白いと感じる形をつくる。 ・ できた布の形を鑑賞し、どんな生き物をつくっていけそうか、次回用意してくると良い材料について考える。 	手だて① 題材名の工夫 手だて② 五感を働かせながらイメージを引き出す場面作り 手だて③ 「思い」を言葉で引き出す働きかけ
3 ・ 4 時	<ul style="list-style-type: none"> ・ 固まった布を芯材からはがし、出来あがった形を確認する。 ・ 色をつけたり、他の材料を組み合わせたりしながら、イメージした生き物の作品をつくる。 	手だて④ 中間鑑賞・振り返り 手だて③ 「思い」を言葉で引き出す働きかけ
5 ・ 6 時	<ul style="list-style-type: none"> ・ つくった生き物の種類ごとにグループに分かれ、屋外展示を行う。 ・ 展示された作品を全員で鑑賞し、自分の作品を紹介し、友達の作品の良さに目を向けて伝え合う。 	手だて⑤ 展示方法の工夫(屋外展示) 手だて⑥ 良さを言葉にして伝え合う活動

〈自分の「思い」や「気付き」をもち、それをもとに考え、表現させる手だて

手だて① 題材名の工夫

題材名の工夫をすることで児童のイメージを引き出しやすくする。例えば、「不思議な動物園～学校の中に動物園をつくろう～」とすることで、つくりたい生き物を具体的にイメージしたり、制作・展示までを見通した活動を意識したりすることができるようする。

手だて② 五感を働かせながらイメージを引き出す場面づくり

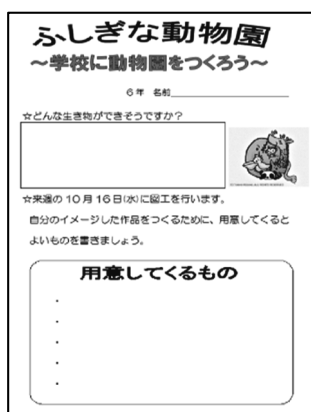
参考作品を見たり・触れたりする場面や、材料に触れながら色々な方法を試して「思い」や「気付き」を引き出しやすくすることで、より自分の「思い」や「気付き」を作品に取り入れやすくさせる。

手だて③ 「思い」を言葉で引き出す働きかけ

手を動かし続けるだけではなく、一度自分の「思い」や「気付き」を振り返り、ねらいをもって活動ができていかなを確認する。その際、言葉に書かせたり、口頭で説明させたり働きかけを通して、児童自身がより具体的なイメージをもつことができるようにする。

手だて④ 中間鑑賞・振り返り

手を動かすだけではなく、中間鑑賞や自分の作品を途中で振り返る場面を設けることで、自分の作品に対する「思い」を再認識したり、深めたりすることができる。また、作品をより良くするための方法を考えることができるようになると考えられる。



【図8】中間鑑賞・振り返りのプリント

〈他のもつそれぞれの「良さ」を尊重し、互いに高め合う姿勢を引き出す手だて〉

手だて⑤ 展示方法の工夫(屋外・グループ展示)

陳列するだけの展示ではなく、自分の作品がより良く見えるような展示方法や、グループで協力して展示させるようにすることで、自他の作品の「良さ」や「思い」をより大切にしながら、他者に伝えようとするようにすることができるようにと考えられる。

手だて⑥ 良さを言葉にして伝え合う活動

漠然としていた「思い」や「気付き」を言葉で引き出すことで、自他の作品の「良さ」がより明確なものとなると考える。

(5) 活動の様子

抽出児童2名の「思い」を形に表しきるまでの過程を記録した。

【抽出児童A】

児童Aは、自分の「思い」や「気付き」をもつことができると意欲的に活動し始める児童である。技能・技術面においてやや課題があり支援が必要である。

1・2時

児童Aは、ペットボトルの芯材と白い布の組み合わせながら、魚やオットセイ等色々な形を見つけることができていた(手だて②)。大まかな形が出来たところで声をかけた(手だて③)。

T: 面白い形が作れているね。どんなイメージでつくるのかな。

C: オットセイみたいなイメージ。

T: なるほど。オットセイの頭はどこかな。

C: 上を向いているところが頭で、こっちが手。尻尾は布を巻いてみた。すごくいい形が出来た。

T: どこから見てもオットセイそっくりだね。

ところで、布はこのままの形で固まるけど、細かいところはA君のイメージに通りになっているかな。

児童Aは、自分の作品を見回した後、左右のしわや手の形を整えて、さらに本物に近い作品をつくることにした。児童Aは振り返り(手だて④)の際に、「どんな生き物ができそうですか」という記入欄に「オットセイ」と記していた。「次回用意してくるとよいもの」の記入欄には「綿やビーズ」を書き込んでいた(手だて④)。

【図9】児童Aの作品(1・2時)



3・4時

児童Aは、芯材からかたまった布をはがしたあと、用意してきた綿をさっそく作品に貼っていた。

T: 綿は何をイメージしているの。

C: ジュゴンの毛だよ。

T: オットセイではなくなっただね。

児童Aは、白い布からジュゴンイメージしたようである。しばらくして、児童は綿を全体には貼らず、ところどころに貼り付けるようになった。

T: 全体に貼るのはやめたのだね。

C: ジュゴンっぽくなくなったから、綿で氷をつくることにした。タオルの白をそのままジュゴンの白で残したいんですけど、いいですか。

児童は目の位置に困っている様子が見られた。そこで、色々な位置に目をおいてみて、一番良いと思う位置を決めさせた。



【図10】児童Aの作品(3・4時)

5・6時

児童Aは「水辺の生き物」のグループで展示を行い、直接地面に置く形で展示をしていた。振り返りカードには、以下のような記入している。



【図11】児童Aの作品(5・6時)

作品名	氷がたくさんついたジュゴン
形の工夫	横向きになっているので、しわがつくから流れに沿ってつけてみた。
色、材料の工夫	綿を氷にして、南極のジュゴンっぽいどうぶつをつくってみた。

児童が「思い」をもとに活動に取り組めた部分を、自分の作品の工夫として受け止めることが出来ている。

【抽出児童B】

児童Bは、落ち着いて自分の「思い」に向き合わせることで、自分の学びを深めていける児童である。最後まであきらめることなく自己の作品作りに取り組ませるようにしたい。



【図12】児童Bの作品(1・2時)

第2時終了の段階では、作った形から「ペンギン」をイメージすることができていた(手だて④)。

3・4時

児童Bは固まった布形を見て悩んでいる様子が見られた。そこで、「思い」を引き出す働きかけを行った。T: 何が作れそうかな。前回の振り返りではペンギンをつくるって書いていたね。

C: 全然ペンギンには見えない。どうしよう。

児童Bは出来上がった形を見て、「ペンギン」には見えないという「気付き」をもつことができていた。(手だて③)そこで、作品を立てるだけでなく、横向きにして観察するなどして、どんな生き物に見えてくるかを考えさせるようにした。

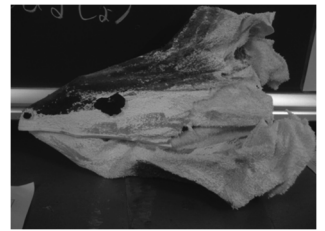
周囲の児童: 魚みたいなひらひらがあるね。

周囲の児童のつぶやきを参考に、児童Bは「マンボウ」をイメージした作品を作ることにした。そこで、児童Bは、図書室から図鑑を借りてきて実際のマンボウがどんな色でどんな特徴をもっているのかを確認していた。

C: マンボウって、あんまりきれいな色じゃないな。本物のマンボウの色をそのまま使わなくてもいいですか。

T: いいよ。不思議な動物園だから、そのままではなくて、自分がきれいだなと思う色を使ってみよう。

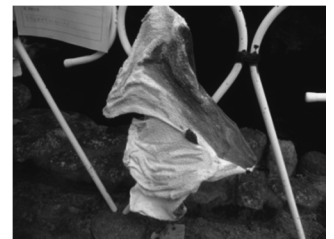
児童Bは、灰色と赤茶色を中心に塗り方を工夫しながら作品を作り、深みのある色使いが印象的な作品ができた。作品名は「カラーマンボウ」となった。



【図13】児童Bの作品(2・3時)

5・6時

児童Bは、「水辺の生き物」のグループで展示を行うことにした。泳いでいるように見せるため、校庭の池のフェンスにワイヤーで吊る形で展示した(手だて⑤)。



【図14】児童Bの作品(5・6時)

作品名	カラーマンボウ
形の工夫	針金を使ってひれを作った。
色、材料の工夫	赤茶色の色具合が難しかった・・・。

色に対する「思い」が題材名や振り返りの感想に表れている。児童が試行錯誤した部分が印象に残っていると捉えることができる。

(6) 手だての成果(○)と課題(●)

〈自分の思い・気付きを大切にさせる手だて〉

手だて① 題材名の工夫

○ 動物園(生き物)という制限をつけることでイメージしやすくなった児童がいた。また、「不思議な」という言葉から、より自分の「思い」を大切にしたい色使いなどを工夫できた児童がいた。

手だて② 五感を働かせながらイメージを引き出す場面づくり

○ 手を動かして見つけた「気付き」や「思い」を作品にどんどん取り入れることができていた。頭の中でイメージさせたり、設計図を書かせたりすることは、計画性を養うが、逆に「型」にはめ込むことになると活動がしにくくなる児童もいると分かった。

- 触れることが出来る参考作品を用意したことで「液体粘土」の特徴に気付くことができた児童がいた。特徴や出来上がる作品例を理解した上で「自分はどんな作品をつくりたいのか」という「思い」をもっていた児童がいた。目で見たり、触って確認したりすることで「言語による説明」以上に児童の気付きや理解が明確になるとわかった。

手だて③ 「思い」を言葉で引き出す働きかけ

- 言葉にさせることで、「○○を作りたいから△△したい」という自分の活動に対するイメージを作ることができている児童がいた。
- 手が止まっている児童は、自分の「思い」を言葉で表すことがうまく出来ない場面が多かった。表現のヒントになるような「思い」を表す言葉の支援が必要である。

手だて④ 中間鑑賞・振り返り

- 自分の作品を途中で手を止めて振り返らせることで、次回の活動のためにどのような材料を集めてくると良いのか、さらにどうすると良くなるかを考えることができた児童がいた。

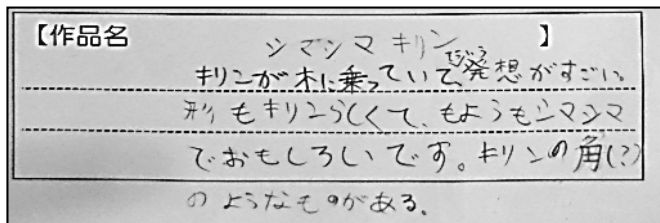
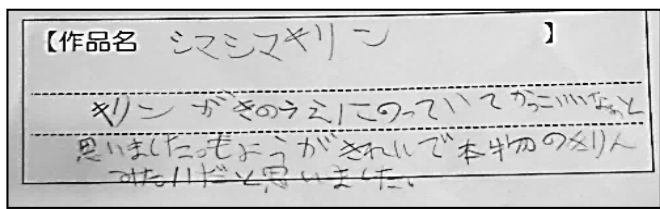
〈友達の作品の良や思い、自分の作品の良さに気付く手だて〉

手だて⑤ 展示方法の工夫(屋外・グループ展示)

- 作品づくりでは時間内につくり終えることができなかつたり、上手く作品が立たなかつたりするなどしたが、展示を工夫することができた児童がいた。友達も児童の発想の面白さに気付くことができていた。



【図 15】 児童の作品



【図 16】 児童の鑑賞カードの記入例

- 草の中に隠して置いてみたり、ワイヤーでつって浮かせたりしながら、自分の作品の「良さ」がさらに引き出せる展示方法を探ることができた。
- エリアごとの友達同士でより良く見える展示につ

いてアドバイスしあうことができていた。

- 友達の展示の工夫に気付き、参考にすることができた児童がいた。
- 児童の中にはグループで限定されていたため、周りの子についていく形になり、自分の作品の良さを引き出す展示について考えることができなくなってしまった児童がいた。

手だて⑥ 良さを言葉にして伝え合う活動

- 「良さ」を言葉で伝え合わせることで、自他の作品の「良さ」を認め合おうとする姿を引き出すことができた。

(7) 実践のまとめ

抽出児童のプロセスからは、児童が自分の「思い」や「気付き」をもとに表現の方法を考え工夫できていた様子が見られた。自分のあらわしたい「思い」や作品の「良さ」に気付き、尊重できた児童は、全体的に、最後まで自信や意欲をもって作品づくりに取り組むことができていた。また、児童は、漠然と活動する中でなんとなく出来上がった表現からも気付きや学びを得ていたが、実践の結果からは、児童が意識できていた「思い」や「気付き」から得ることができた学びの方が児童にとって印象深かったことがわかった。

『手だて② 五感を働かせながらイメージを引き出す場面づくり』を通して、頭だけではなく、触覚や視覚を働かせながら自分が面白いと思う形や、針金などの補助材料の組み合わせをのびのびと見つけることができていた。体全体を大きく働かせながら可能性を試すことができる場面づくりが、児童の「思い」や「気付き」を引き出すために効果的であることがわかる。

振り返りカードの記入からは、自分が一番試行錯誤したところを思い浮かべて記入することができている様子が多く見られた。自分の「思い」と最も向き合い、形としてあらわせたところは、児童にとっても印象に残る経験や学びとなっていると捉えることができる。また、『手だて③「思い」を言葉で引き出す働きかけ』を通して引き出された、自分自身の「思い」や「気付き」をより意識できている様子も見られる。このことから、児童の「思い」や「気付き」を言葉で表現させる場面の大切さがわかった。

また、今回の実践では、手を動かし続けることで自分の「思い」や「気付き」を引き出すこともできていた児童もいたが、次第に目的を失ったまま漠然と活動に取り組んでいた児童も見られた。児童にとって、手を動かし続けるだけではなく、途中で自己の活動を振り返る場面が重要であることもわかる。一度手を止めて、自分の作品を見ながら、「思い」や「気付き」を整理する場面が必要である。そのためには、『手だて④ 中間鑑賞・振り返り』のような、客観的に自分の活動を振り返る場面や、友達との交流を通して新しい気付きを得たりすることができる場面設定や、『手だて③』

のような児童個々の中にある、表現のきっかけとなる小さな「思い」や「気付き」をつなぎ合わせながら、自分がどんなことをしたいのか、そのために何をやる必要があるのかといった活動に対する目的をもたせる働きかけが必要である。

また、児童の表現する意欲や自信を引き出すためには、自分自身が自分のことを認めることができると、他者からも自分のことを認めてもらうことができることの両方が必要である。児童に活動を通して、「できた」「やってよかった」といった成功体験を積み重ねることが、児童の表現する意欲や自信につなげていくことが大切だとわかった。

3 教師力向上実習Ⅲ

自他の「思い」や「気付き」を尊重しながら表現できる授業づくり
— 図画工作の「表現」「鑑賞」の授業実践を通して —

(1) 児童の課題

実践は実習校Bの第5学年(児童数31名)で行った。自己肯定感が低く、自他のことを大切にすることが難しい児童がいる。同様に、自他の作品を粗末に扱ってしまう様子が見られた。

しかし、感受性が強く、相手の言葉から個々に何かを学び取り、考えを深めていける様子が見られる。

(2) 実践のねらいと目指す児童の姿

自分の作品の「良さ」に気付き、大切にすることができるとともに、どの友達の作品にも「良さ」や「思い」があることに目を向けさせたい。自他を同じように尊重しようとする児童の力を引き出したい。

(3) 実践科目・単元

実践教科：図画工作

単元名：「針金タワーを作ろう」(5時間完了)

『世界に一つの針金タワーをつくらう』

本題材は、針金を曲げたり、つなぎ合わせたりしながら「タワー」をつくる題材である。

(4) 実践の流れと手だてについて

〈自分の作品の良さに気付き、大切にさせる手だて〉

手だて① 五感を働かせながらイメージを引き出す工夫

手を動かすことで見つけた形やアイデアを活かすようにさせ、作品に「思い」や「気付き」をどんどん取り入れることができるようにする。

〈どの友達の作品にも良さや思いがあることに気付き、認めあえるようにする手だて〉

手だて② 鑑賞の工夫

全体の中から好きな作品の良さを見つけさせるのではなく、座席グループの中で鑑賞させることで、普段はあまり目を留めないような友達の作品からも良さを見つけ、伝え合えるようにさせたい。

手だて③ 鑑賞カードの工夫

鑑賞カードを、季節を感じさせたり、もらったときにうれしいと感じられたりするようなものにすることで、活動意欲を引き出すことができる。

(5) 手だての成果(○)と課題(●)

〈自分の作品の良さに気付き、大切にさせる手だて〉

手だて① 五感を働かせながらイメージを引き出す工夫

○ 手を動かしながら自分で見つけた針金の曲げ方や面白い形をもとに作品を作ることができていた。児童の中には頭の中でイメージするよりも、手を動かす中で発想を膨らませることが得意な児童がいる。設計図などを描かせることで、逆に表現の幅が狭まってしまいうこともあるため、アイデアスケッチなどはねらいに応じてとり入れるようにしたい。

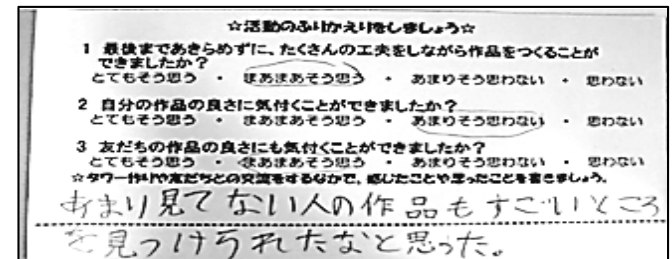
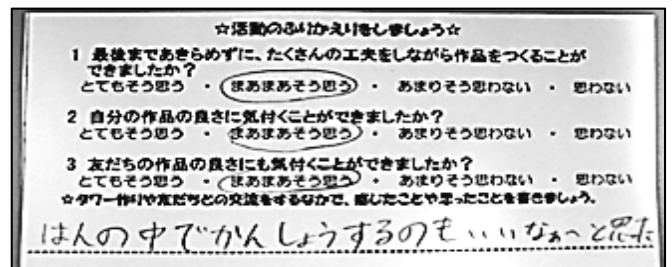
● 児童の中には「思い」や「気付き」をもつことがないまま手を動かすことが優先されてしまい、作品に対する愛着を持つことが難しい児童がいた。やはり児童が自分自身で「思い」や「気付き」をもてるよう、一旦手を止めて自分の作品を眺めたり、言葉で思考を整理したりすることができる場面を設けることが必要である。

〈どの友達の作品にも良さや思いがあることに気付き、認めあえるようにする手だて〉

手だて② 鑑賞の工夫

○ グループ鑑賞後の振り返りでは、「あまり見ていない人の作品もすごいところを見られたなと思った。」「はんの中でかんしょうするのもいいなと思った。」といった記述が見られた。はじめは抵抗感を見せていたグループ鑑賞であったが、前向きな気持ちをもつことができた児童もいたことがわかる。

● 他者に対しては肯定的な評価をもつことができて、自分自身については低い評価をしている児童がいることが分かった。今後、様々な場面で児童が自分の「良さ」を前向きに受け止めることができるような働きかけが必要である。



【図 17】 児童の活動に対する感想

手だて③ 鑑賞カードの工夫

○ 自他の良さを大切にさせるためには、それを記入するカード自体に教師の「思い」があらわれる形に

するとより効果的であるとわかった。しっかりしたものであるほど、児童の中にも緊張感が生まれると考えられる。

- 鑑賞カードを一回きりのものにせず、ポートフォリオにして、自己の作品と自他の評価を綴ることができるようにすることで、学びを振り返ることができるような工夫も必要である。

(6) 実践のまとめ

鑑賞前には「自分が普段はあまり目を留めないような作品にも良さはあること」と、「その良さを見つけられることも5年生で必要な力であること」をおさえた。それにより、児童の中にはグループ鑑賞に目的をもって取り組むことができた児童もいたことがわかった。

私は、はじめ、児童の実態からグループ鑑賞を行うことは難しいと考えていた。しかし、学級担任の先生の「児童がつまずきそうなことを避けるだけでは、児童も自分の殻を破ることができない」という言葉を受け、グループ鑑賞を取り入れることができた。児童の実態からみて難しそうな活動内容を簡単な内容に変更したり、児童同士が衝突しないように配慮した活動内容にしたりして、児童全員が学習しやすい環境を整えることは大切である。しかし、あえて児童や学級のもつ課題に挑戦させることで、児童が自分の殻を破って成長出来ることもあることを学んだ。また、そのような際には、教師の「思い」を児童にしっかり伝えてから活動させることで、児童も自分の活動に目的をもって取り組むことが出来るようになることがわかった。

V 本実践全体の学び

1 学級づくり

児童が、意欲や自信をもって自分のことを表現できるようになるためには、学級の中で自分も他者の両方を尊重できることが重要だと学んだ。

児童は一人一人「良さ」をもち、得意なことと苦手なことももっている。また、児童個々に発達段階が異なり、他の児童にとっては簡単に受け入れられることが、ある児童にとってはまだ受け入れられず、気持ちがぶつかりあってしまう場面もある。個々の発達段階の差が、不信感や劣等感につながらないようにすることも大切だと学んだ。児童に、みんな同じように成長しようとしていることや、互いに「良さ」をもっていることなどに目を向けさせながら、対等な立場で向き合える学級づくりに努めていきたい。

また、今回の学級づくりでは約1週間の中で互いの「良さ」を見つけさせる活動を行った。しかし、児童は学校生活全体の様々な経験を通して、少しずつ内面的な学びを積み重ねていっている様子が見られる。児童の「思い」や、個々の発達段階に寄り添い、長期的な視点で児童の成長を支えていく姿勢をもつようにしたい。

2 授業づくり

児童自身の「思い」や「気付き」が、表現する意欲や自信を高める出発点となっていることがわかった。活動を、教師に与えられた課題として捉えさせるのではなく、自分自身の「思い」や「気付き」を出発点にした主体的な学びとして、活動に対する達成感や満足感につなげていくことを意識していきたい。

また、目に見える学習の結果だけにこだわらせるのではなく、児童の目には見えない部分の成長にも気付かせていきたい。知識を習得したり、技能を向上させたりすることは児童の自己に対する意欲や自信につながる。一方で、結果にいたるまでの過程にも目を向け、自分が一生懸命考え工夫した内面的な「良さ」や出来上がった自己の作品自体に愛着がもてるようにしたい。そのために、児童自身の「思い」や「気付き」を言葉で引き出し意識させながら、形にするために最後まで表現させたり、活動に取り組ませたりするようにしていきたい。

また、児童が友達との交流の中で学ぶ姿も多く見られた。児童は、自分にも他者にもあるそれぞれの「良さ」や「思い」を受け止められるようになることで、より自分の「良さ」を活かした表現する意欲や自信を高めていくことができると考えられる。

VI おわりに

児童が、自分の「良さ」や「思い」に気付き、それを出発点として自己の可能性を広げていけるよう支えていきたい。そして、自分の夢や目標をもち、形にするために、考え挑戦する児童の成長を支え続けることができる教師を目指していく。

【主な参考文献】

1 引用文献

- ・ローエンフェルド 1963『美術による人間形成』黎明書房

2 新学習指導要領関係

- ・文部科学省 2008『小学校学習指導要領 図画工作編』
- ・文部科学省 2008『小学校学習指導要領 総則編』
- ・文部科学省 2008『中学校学習指導要領 美術編』

3 学級づくりに関わる文献

- ・名古屋市教育委員会『人権教育の手引き 実践編』
- ・國分康孝 『エンカウンターで学級が変わる(小学校編)』図書文化
- ・古荘純一 2009『日本の子どもはなぜ自尊感情が低いのか』光文社新書

4 授業づくりに関わる文献

- ・大学美術指導法研究会 2009『平成20年度告示新学習指導要領による「図画工作科」指導法 理論と実践』日本文教出版
- ・福田 隆真 茂木 一司 2010『美術科教育の基礎知識』建帛社

【付記】

連携協力校の校長先生、教頭先生、教務主任の先生を始め、すべての教職員の皆様、実習にご理解、ご協力をいただき、温かく見守ってくださったこと心から感謝申し上げます。また、教師力向上実習を進めるにあたり教職大学院の先生方には多くのご指導、ご助言をいただきました。本当にありがとうございました。